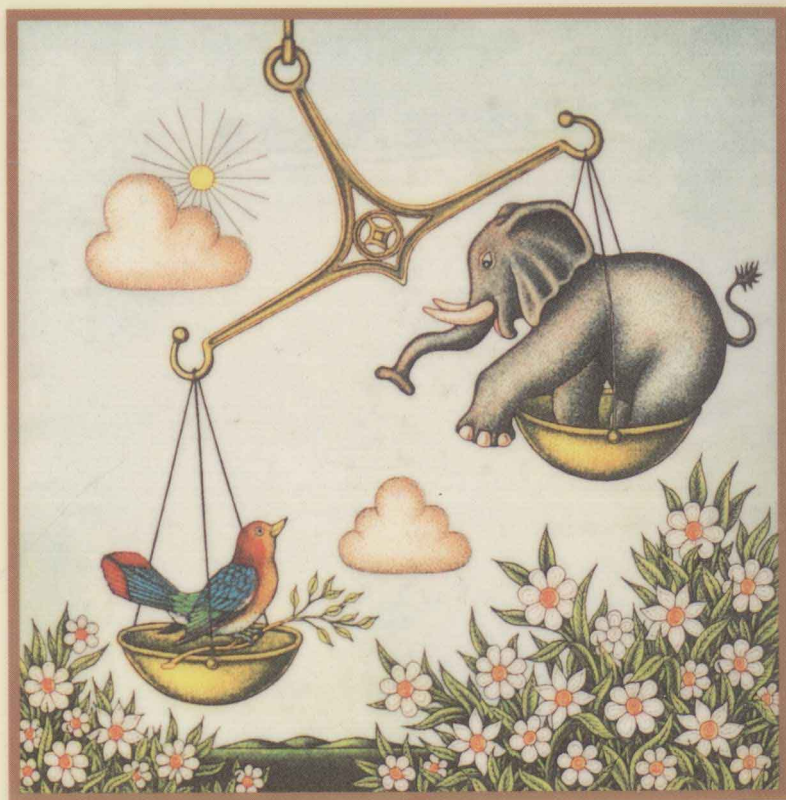


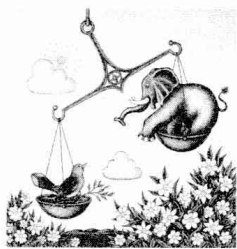
私たちが、 生きること

ありのまま舍



新潮社

私たちが生きること



ありのまま舍

新潮社

ありのまま舎

障害者自立促進企画団体。主宰者は、山田富也
(進行性筋ジストロフィー患者・1952年生れ)。
活動の一環として『障害者ありのまま記録大賞』
(選考委員：ノンフィクション部門・澤地久枝、
詩部門・天沢退二郎)を設定。本書は、第一回
受賞作品集である。詳細は直接ありのまま舎へ。

住所：〒983 仙台市二の森11-18

電話：022(295)1685



わたくし
私たちが、生きること

一九八六年一〇月二〇日 印刷
一九八六年一〇月二五日 発行

編者 ありのまま舎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話(業務部) 03-二六六-五一一

(編集部) 03-二六六-五四一一

振替東京四一八〇八

印刷 東洋印刷株式会社

製本 植木製本株式会社

定価 一〇〇〇円

© Arinomamasha
1986, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-363901-6 C0095

私たちが、生きること ■ 目次

障害者ありのまま記録大賞のこと	澤地久枝	7
流れ	大橋一誠	11
一本橋の向うに	熊倉多佳子	13
雨	藤井武志	63
白い道標 ^{みちしるべ}	中野昭南	65
未来への讃歌	小久保雄三	103
みちのり	牧野順子	107

ちっぽけな命だけれど……………但野洋一 137

今、思うこと……………宮久美子 139

自 我……………下山五郎 155

歲月の中で……………金田亜有実 157

アカシヤの歌……………大橋一誠 181

遠い島……………嶋田和子 183

詩、深みと響き 天沢退二郎 219

装画
フォルカー・クーン

私たちが、生きることに

障害者ありのまま記録大賞のこと

澤地久枝

ここにおさめられているのは、「第一回障害者ありのまま記録大賞」の、優秀作ならびに佳作となった作品である。

一九八五年春に企画が発表され、九月三十日のしめきりまで、記録一九二篇、詩五〇七篇（二六九名）の応募があつた。この賞は、応募資格が障害者（障害児をふくむ）のみにかぎられているという点でユニークな性格をもっている。おそらくこれだけの規模をもつ障害者だけの賞は、世界でもめずらしいかも知れない。

世間的には「弱者」であり、意思発表の機会に恵まれない人たちが、どれほど語りたい人生を抱いているか、困難な事情のもとで、予想をはるかに越える多くの作品が寄せられたことは、その熱い思いと訴えの証明であるようにも思える。

賞のもうひとつの個性は、主催の「ありのまま舎」の存在そのものにある。このささやかな会は、三人兄弟すべてが小学生初学年で筋ジストロフィー症罹患の山田三兄弟がつくった。

長兄寛之さん三十三歳、次兄秀人さん三十四歳の死を見送った富也さんはいま三十四歳。兄たちを動かして障害者自立促進の運動をすすめてきた富也さんは、一人のこされたこの三年間、むきになったように仕事をひろげてきた。その二本の柱が障害者の自立ホーム建設と障害者の文学

賞設立だった。

『さよならの日』という自主製作の映画に出演した後で、秀人さんからもらった手紙がある。「二十年になる入院生活の中で、初めて一カ月間も外の生活をして、本当によかったと思います。／好きな物を食べて、毎日友人におフロに入れてもらい、天国でした。／その友人が本当にいい若者で、彼らと一緒に生活ができたらどんなに楽しいことでしょう。そんなにしてもらったおかげで、病院に帰ってきてホームシックきみです。だから秋は淋しいのでしょうかね。当分は静かに身体を休めようと思います。／富也はこの映画のプロデューサーとして、またお金集めにかけまわっています。兄は雑誌『ありのまま』を復刊しようと頭をいためています。／あわただしい時の流れが動けぬ身体の上を容赦もなく過ぎていきます。僕たちはとり残されているのでしょうか。それとも流されているだけなのでしょうか」

この便りの四年後に、山田秀人さんは私たちの世界を去った。富也さんが、指をあわせる力さえ乏しい車椅子生活者の身で「奔走」をつづけるのは、遺言のようなこの兄の言葉によって、はげしく突き動かされてのこととひそかに想像している。

「ありのまま舎」はきわめて貧しい。しかし「記録大賞」は大賞百万円、優秀賞二十万円、佳作十萬円の副賞である。どんなに重度の障害があろうとも、言葉によって表現しようと志す人々に道をひらく。すぐれた作品には、「正当な」御褒美がある方がいい。そう考えてきめられた。

朝日新聞厚生文化事業団による理解と協力、全国社会福祉協議会や、草のひかり福祉会の後援によって、かつがつに賞は運営されている。詩は詩人で明治学院大学教授の天沢退二郎氏によって選ばれ、ノンフィクションは私が選の責任を負っている。

選考の第一段階では、「ありのまま舎」の地元仙台市を中心に、多くのボランティアの人たち

が参加して読んでくれた。私たちは同じ思いを味わっている。文章や構成はつたなくても、その障害のひどさと、赤裸々に表現しようと決意した人の迫力が、「選考」などという言葉をどこかではじきとばすほどであった。

第一回は、大賞はない。もし、「障害者だから」と少しでも妥協するなら、大賞としていい作品はあった。その水準は、ここに収録された作品が十分に語りつくしている。しかし私たちは、ただに障害があっても、文章は健常者とおなじ到達点が可能と考え、あえてきびしい選考基準とした。第二回の今年は、大賞が出るかも知れない。その作品が、低迷する活字メディアの刺戟となり賦活剤になるような「大賞」がやがて生れることへ、明るい期待をもっている。

熊倉多佳子氏（五十二歳）「一本橋の向うに」は、末っ子が四歳という三人の子の母、女教師でもあった人が、重症の筋無力症をわずらいつづけてきた十余年の記録。家族の愛情と介護、女性患者としての独得の病状を一篇にはまとめきれず、たとえば毎月の生理についての基礎体温表などの克明なデータがそえられていた。医師たちも見届け得ていない病む記録資料である。これは現代医学にとつての礎石となり得ると思ひはしたが、作品としては優秀賞にとどまった。いまでも呼吸マヒの発作を道づれの人生を生きる人である。もう一篇の優秀賞は、パーチェット病による途中失明者、中野昭南氏（四十一歳）の「白い道標」にきまつた。

障害者というと、「自分には関係がない」と思う多くの人がいる。しかし、たとえば原因不明の難病を背負った子が生れる可能性は、すべての生命誕生のパートナーとしてある。健康が自慢な人にも、交通事故や労働災害による障害者の人生があり得るし、すべての人間は、年を重ねることにより、いつかはなんらかの障害を負う。公平に障害者となる。

佳作の牧野順子さん（五十歳）は医師であつた。躁鬱病が引金になり自殺をはかり、小脳の障

害という後遺症によつて医師であることを断念した。

まったくさまざまな人生を、幅広い年齢の人たちが心の扉をひらくように書いている。

いのちの愛しさを知らない人々に、また医師たちにぜひ読んでもらいたい。

明日知れぬ生。そしてまた明日がいかなる日であるのか、立つことも歩くこともないおなじ日が確実にやつてくる明日であることをみつめている眼。

言葉が過剰にうたわなくても、書かれた事柄そのものが、「生きたい」「生きるのだ」「でも、答をほしい」という切実な思いを伝えている。すこやかな者も病める者も、ここに書かれた事実と生きる姿勢の直さ^{なま}によつて、生きてゆく爽やかな勇気をもらうはずである。

それにしても、「明日知れぬいのち」の痛ましさをなんにたえようか。狂うほどの恐怖や絶望と向きあいつつ、なお笑顔をみせようとしている人々に、私たちはなんと答えるべきなのだろうか。どうか、一人でも多くの人に読んでいただきたいと祈つて私は頭を深くたれる。「いのちの火よ燃えつづけよ」と――。

詩の優秀賞の大橋一誠さん（十七歳）、特別賞の記録「歲月の中で」を書いた金田亜有実さん（十五歳）の作品と生活は、テレビ朝日の「ニュースステーション」とラジオの文化放送によつてとりあげられた。私は主催者ではないけれど、この賞が温く迎えられていることに熱い思いをかきたてられる。

第二回の選考がいま進んでいる。今年も去年を凌ぐ応募があり、賞の前途は華やいて見える。華やきがほしい。いのちの持ち時間を切られ、あるいはその内容を限定されているすべての人々のために――。

（一九八六年九月）

流れ

大橋一誠

青い水晶のような空を背に桜は咲き乱れ、春は過ぎていった

熱く強い日差しの中、セミの声は重なりあい、夏は過ぎていった

風のささやきに、小さな影を感じる頃、秋は過ぎていった

曇天のなかに立つ黒い裸木から、命が解放される時、冬は過ぎていった

しん気楼のように目の前をゆらいでいった四季

流れていく季節、去っていく世代

その中で私もまた、移り行くのだろう

新たな自分へ

小さな夢を抱えて

たとえ、春の花粉、夏の雨滴、秋の落ち葉、冬の粉雪となっても……

それらが季節を肥やし、世代を生むのだから

(昭和43年生まれ。ウエルドニツヒホフマン病、一種一級)

一本橋の向うに

熊倉多佳子

私が重症筋無力症と診断されたのは、今から、十三年前であつた。当時私は三十七歳、小学校の教員をしていた。

重症筋無力症とは、疲れると普通の人以上に筋肉の力が抜ける病気で、初期症状としては次のようなものがある。

光が眩しい。瞼が下がる。言葉が不明瞭。噛めない。飲み込めない。握力が衰える。

これ等初期症状のままでいる人もあるが、全身脱力や、呼吸困難を伴う重症型へ発展する場合もある。私はこの呼吸困難を日常とする稀に見る重症患者である。

私が初期症状を感じたのは、昭和四十七年の初夏であつた。その日、校庭に出ると太陽がすごく眩しかった。準備運動をしている児童の白のユニホームが強烈に目を刺激する。私は自分の向きを変えた。でも、やはり眩しく片目ずつ閉じて体育の授業をした。

特に初期の症状は見え隠れする。二、三日すると、何となく忘れていたが、夏休みも近づいたある日、プール指導で、異様な太陽の光を感じた。プールの水が、ガラガラとして目を刺激する。私は思わず目を閉じ、へたへたと坐り込むような脱力感を味わつたのだ。

その後症状は、断続的に現われた。右腕が上がらない、言葉が鼻に抜ける、不意に転ぶ、食べ物が飲み込みづらいなどである。

その年の十一月末のことだった。一週間、ほとんど食事がとれずついにダウンした。私はタクシーに乗り、下都賀病院へ行くと、神経内科の診察室へよろけるように入った。そこで初めて「重症筋無力症」という名を聞いた。

「今は治らない病気です。でも筋肉を動かす薬があります。この病気で死ぬことはないでしょう。注射しますから、今日は食べられますよ」

医者からそう告げられ、今日は腹一杯食べられる」とそれだけで嬉しかった。私は両手一杯買物して帰ったが、三口目には食べられなくなってしまった。

私は箸を放り出すと古い医学書を取り出した。へ手足の麻痺から始まりやがて呼吸器を冒され死に至る」と書いてある。

医者の言葉は慰めに過ぎなかった、今の医学では手の施しようのない病気になってしまったのだ。あー、私は死ぬんだと思うと、とめどなく涙が流れた。やがて私の快気祈願のため道祖神に行った母が帰って来た。

「大丈夫、治るってさ」

と力付けるように言ってくれたものの、いつまでもしょんぼりと坐っている母の心中は苦しかったろう。娘の私に死水をとって貰おうと、娘一家の留守を守っている七十七歳の母である。私は頭からすっぽりと布団を被った。「この母よりも私が先に逝くんだ」と思うと無性に悲しく、母のこと、三人の子供のこと、そして夫と自分のことを一晩中考え続けたのだった。

翌朝、病院から「きのう食事出来ましたか」と電話があった。